

伊東玉美著

『小野小町 人と文学』

佐藤 信 一

伊藤玉美氏による小野小町の伝記である。この著作は、勉誠出版の「日本の作家100人」というシリーズの一冊として書き下ろされたものである。以下に目次を掲出しておく。

はじめに

第一章「小町の時代」兼好の疑問／小町の時代／衣通姫の流／六歌仙の時代／小町の同時代人／全盛期か、誕生か／東宮の御息所高子の時代

第二章「小町の歌」かぎりとうつろひ／夢の歌群／収斂と解体／小町集という物語

第三章「小町の位置」小野の一族／小町の父と母／善男・真備・采女／小町氏女説／小町の名／小町の地位／篁と小町

第四章「小町の物語」異本「小町集」の物語／あなめの説話／女の人生―「玉造小町子壮衰抄」／注釈世界の物語／能の小町

第五章「小町の旅」小野氏の性質／祈雨する小町／病む小町／秋田県雄勝の小町伝説から／聖女の運命

参考文献

あとがき

いささか愚直であるが「はじめに」から、順を追ってみて行

きたい。ここで、伊東氏は近年、時代劇が見られなくなってきたためか、「水戸黄門」がどういう話か、学生に問われたエピソードを紹介している。「実像以前に虚構性豊かな物語の方も語らなくなってきた」（6頁）とされる。そのような語られ、ふまえられてきた古人の多くが、学校教育を通してはじめて出会う人になってしまった。小野小町も例外ではあるまい。伊東氏は「小野小町にかかわる旧跡をたどるバス旅行のガイドさんになったつもりで、この本に乗り合わせた皆さんに、彼女にまつわる文学・歴史・民族をご案内したいと思う」とされるが、このように明快な評伝を得たことは、それこそ小野小町にとっても幸いなではあるまいか。

第一章「小町の時代」では、小町の生きた時代が的確な伝記考証によって鮮やかに再現されている。「三十六人歌仙傳」や「和歌色葉」を手掛かりに、「古今和歌集」などの勅撰集の詞書などによって仁明天皇時代と清和・陽成天皇時代のいずれかに活動の最盛期があったと推定している。

第二章「小町の歌」は、小野小町の歌をいくつかの類型に分けて論じている。「かぎりとうつろひ」では、「百人一首」にも載せる「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」の歌を「古今集」の用例や、「百人一首」の古注「応永抄」や、「毘沙門堂本古今集注」、契沖「古今余材抄」を引いて「ふる」が「旧る」か「経る」かを検討している。さらに「色見えうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける」を挙げ、「大人の知的遊びだったなぞなぞの形式にあてはめて、心変わりし捨てられていく我身を戯画的に表現する、一種自虐

的な悲しみが流れている」(56頁)とする。「夢の歌群」では小町の夢の歌を一首一首読み解いている。そこでは「鶯鶯伝」や「閨艶詩」と言った漢籍の故事が踏まえられていることを証し立てている。「収斂と解体」では、小町の歌の特徴を「言葉遊びで覆った、自虐的なまでの比喩」(69頁)と捉える。「小町集」という物語は、「小町集」に収められた歌をいくつかのキーワードに分けて考察を加えている。

第三章「小町の位置」は、小町の出身地や両親が誰か、宮中での立場はいかなるものであったのかを考察している。小町が、学問の家とも言える小野の一族であったことを確認し、古注釈や系図の類では小野良真(良実)を挙げているのに対して疑問としている。さらに、氏女として恋を禁ぜられたという説を紹介した上で「内からの理由」(100頁)で、小町の歌があのような色調を帯びたとする。その上で小野篁との血縁関係は否定しながらも、「小町と篁はそれぞれの回路で「都市」や「日常」のもう一段下にある深層世界―冥界であったり、心の闇であったり―と行き来する能力のある人」と認識されていた」(111頁)とする。

第四章「小町の物語」は、驕慢な女「小町」というイメージの淵源を、異本「小町集」に探るもの。あなめの説話(小町鬨體説話)が検討されている。さらに「玉造小町壮衰書」を採り上げ、その作者が誰なのかを、空海、安倍清行、三善清行説を紹介し、その叙述の特徴として「何かのテーマに関する用語を畳みかけるように列挙していく語法」とし、「往来物」や「類書」との関わりを述べる。

第五章「小町の旅」では、伝承が「作り出される」場合もあるとされた上で、「自ら望んだささやかなものはどうしても得られず、しかし他人に多くのものを与え続ける聖女」(211頁)と小町の像を結ぶ。小町の悲しみを、普遍性を持ったものとして捉えている。

不遜な言い方になるが、読んでいて楽しい本であった。行間に、著者の語り口が感じられた。本書全体を通じて気付かされるのは、伊東氏の小野小町に対する熱い思い、また深い愛情である。史料を積み上げて、しかも、わかりやすく明解に小町の実像に迫ろうとする姿勢に、心から共感するものである。

(二〇〇七年八月一日刊 四六版 一二二ページ 勉誠出版)